

一探求・川にちなんだ万葉集の歌一

万葉の川心 第18回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

川を詠む

夕さくらず 河蛙鳴くなる三輪川の

清き瀬の音を 聞かくし良しも

(巻第十 二二三三番歌)

夕暮れ時、一人教室にいと、それまでの喧嘩はうそのように静まり返る。ななめに長い陽がおだやかに入り込み、空を染める橙色は、ほどなく深い紅へと変わっていく。心までしんとしたとき、それまで聞こえなかった「音」が、閑閑とした胸に響いてくる。巢に返る鳥の鳴き声、池に落ちる水の音、急に強まったストープの、小さな溜め息。豆腐売りのラッパの音、自転車の呼鈴、近くを走る新幹線のシュンシュンという鳴き声——一日の終わり。すべてが闇に消される前のおだやかな時間を樂しむことは、幸せの貯金を、ちよつとだけ増やすかもしれないと思う。

万葉集の巻十は、春・夏・秋・冬の四季によって雑歌・相聞を分けた部立となっている。巻八と同じ部立だが、巻十は作者不明の歌が多い分類は難行したと思われるが、この巻に載せられた歌は、万葉集独特の素朴さ大胆さというより、歌を練って技巧を重ねていることから、その作者は、宮廷の官人達を思わせる歌が多いのも特徴である。その中より、秋の雑歌で、一首、「川を詠む」がある。「夕方になるといつも、カジカの鳴く声のする三輪川の、清らかな瀬の音を聞くのは、本当に気持ちがいい。」

川には、いくつもの魅力がある。季節毎に、桜を運び、紅葉を映す清らかな「流れ」。その景観は、もちろん代表的な魅力であるが、万葉集のなかで歌われた川の魅力を考えると、もう一つの代表は、実は「音」

にある。水が流れると、そこに必ず音が生まれる。澄んだ川音には、なんとも言えない懐かしさと、心を落ち着ける一定のリズムがある。原風景ならぬ、原音とも言えるもの……。人の始まりに思いを馳せれば、命を宿したとき、私達は、すでに羊水という水の中にいる。そしてそこで母の心音を聞いている。血液の流れる音を聞いている。水の音の懐かしさは、そんなところからくるのかもしれない。

自然の音は、美しい音楽となって、人をなごませる。でも、都会にいと、そればかりでなく、夜遅く、遠くを走る電車の音や、車の流れていく音でさえ、せつなくなるときがある。何かに疲れたとき、恋をしたとき、そして、恋を失ったとき。

この歌の初句、「夕さくらず」の「さる」を調べていたら、改めて、こんなことが分かった。「恋人が去る。恋人と別れる。恋人と離れる。」万葉でいうと、「サル・ワカル・ハナル」になる。サルは、共に存在するものの感情にかかわらず遠くへ行ってしまうこと。ワカルは、はつきり挨拶をして別れること。ハナルは、心理的にはつながっていないながら物理的に間があることである。遠距離恋愛という言葉に甘い響きがあっても、別居結婚にはどこか淋しさが漂う。「別れる」と「離れる」には大きな隔たりがあり、昔の区別は今もなお続いているように思われる。

三輪川は、奈良県桜井市を発する初瀬川の、三輪あたりの部分の名称である。その先で、佐保川に合流し、大和川に注ぐ。静かなたたずまいのこの地に初瀬川は流れ、それを見守るように歌碑が建てられている。

